



第4回 2021沖縄シンポジウム「沖縄とともに―慰霊の日を迎えて―」

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 部会員 市川 洋樹 (70期)

1 はじめに

沖縄県は、6月23日を「慰霊の日」と定めており、それに合わせ、2021（令和3）年6月26日、当部会が企画した沖縄シンポジウムが行われた。第1部では精神科医蟻塚亮二氏に、第2部では立石雅昭新潟大学名誉教授に、それぞれ講演を依頼した。

沖縄シンポジウムは、例年弁護士会館クレオで実施しているものの、本年は、コロナ禍の影響で、オンラインでの実施となった。

2 第1部 沖縄戦を忘れない
— 沖縄戦と PTSD —

蟻塚亮二氏

蟻塚氏は、2010（平成22）年に「沖縄戦による晩年発症型PTSD」の症例を発見された。「沖縄戦による晩年発症型PTSD」とは、戦争体験をした方が青壮年期には何ごともなく、戦争体験から数十年後に、発症するものである。蟻塚氏は、実際に診察した症例を紹介の上、沖縄戦は住民を巻き込んだ持久戦で、県民42万人のうち死者が12万2000人（県民の4分の1に相当する人数）にものぼっているという特徴があり、住民の暴力的死別体験の多さが、大量の精神疾患等を生んだのではないかと話された。また、戦争のトラウマは、養育貧困（愛着障害）を通して、虐待、うつ病などの形で戦争記憶が世代間伝達するものがあり、「沖縄に戦後はない」という指摘をされた。

蟻塚氏の講演は、詳細なパワーポイントでの資料を基に、福島原発避難民にも言及され他の事象を原因とするPTSDとの比較もする等、大変わかりやすいものであった。

蟻塚氏の講演後、当部滝沢香会員が蟻塚氏との対談を行った。対談では、同会員からの質問及びその回答等を通じて、参加者の理解をより深めることができた。

沖縄戦による晩年発症型PTSDは、終戦から相当

期間が経た時に発症するため、戦争によりどのような被害が生じるかの事実認識の困難性及び重要性を感じた。また、戦争記憶は、世代間伝達もするため、今なお戦争の被害が生じているといえる。戦争を過去のこととして風化させてはならないと感じた。

3 第2部 沖縄は今なお本土の捨て石か
— 辺野古新基地建設予定地の地質・活断層について —

立石教授は、地質学・堆積学の見地から辺野古新基地建設予定地の地質・活断層の問題等について説明された。建設予定地には軟弱地盤があるため、建築構造物の支持層には適さず、立石教授が代表を務める辺野古調査団は、沖縄防衛局等に複数回にわたり、その点についての質問書及び要望書を提出されている。沖縄には米軍基地が偏在しているだけでなく、立石教授の指摘のように辺野古新基地建設は合理的・科学的ではないという問題があり、さらに、2019（平成31）年2月の辺野古新基地建設に必要な埋め立ての賛否を問う県民投票では、反対の得票が多数派であった。こうした状況であるにもかかわらず、国は辺野古新基地建設を強行している状況である。

当部会では、2020（令和2）年10月にも立石教授を招いて、勉強会を実施しており、LIBRA・2021年3月号にその報告記事を掲載しているので、ご参照されたい。

4 最後に

今年の沖縄シンポジウムは、オンラインでの実施となったものの、アンケートでは、好評の感想が多かった。こうした感想からも、沖縄シンポジウムは、沖縄に多くの犠牲を強いてきた過去及び現状を知り、再認識できる機会となったと考えている。当部会では、戦争の悲惨さを忘れることなく、平和主義及び戦争放棄を定めた憲法を守るため、今後も「沖縄とともに」をテーマに、沖縄シンポジウム、写真展、勉強会などを開催することを企画している。